

昭和ノスタルジー／ロリマゾ（蕾の悦虐）

幼なマゾの契り

闇に葬られた戦災孤児の淫虐体験



原 案 W I L L 様
小説化 濠門長恭

目次

その日暮し.....	- 3 -
浮浪児狩込.....	- 9 -
弟分の正体.....	- 12 -
全裸に焼印.....	- 20 -
空砲の恥辱.....	- 24 -
夜通し拘束.....	- 31 -
訓練と調教.....	- 35 -
最初の契り.....	- 57 -
残虐米軍人.....	- 72 -
身代り折檻.....	- 97 -
東西獅子舞.....	- 110 -
封印と焼印.....	- 122 -
幸せな絶望.....	- 131 -
【後書き】.....	- 135 -

一人称小説を書くにあたって、筆者は語り手の識字能力を考慮している。しかし、この物語に設定した時代における漢字教育水準を筆者は知らない。

主人公は教育の機会に恵まれなかったことを考慮すれば、もっと漢字を少なくするべきであろうが、読みやすさの観点から現在の教育漢字すべてを使用することにした。ただし、固有名詞や身体の一部を表わす一部の漢字および鞭縄などのSM用語は制約の限りではない。また、主人公は一年半前までは軍国少年だったから、軍曹や少佐、隼や屠龍、鬼畜といった字も知っている。

なお、章題は主人公ではなく作者が決めているので制約外である。

いずれにせよ、この小説はフィクションであり、登場する人名・地名・団体・年齢は、実際には過去にも現在にも存在しないのであるから、そこに漢字を加えても問題はないであろう。

その他註記

※本文中では「エッチ」という語を使っていない。この言葉が使われるようになったのは1960年代からである。それにしてもなんと便利な言葉であることか！

※サディズムやマゾヒズムの概念は、大正デカダンから昭和初期エログロナンセンスの時代に、知識人の間では知られていた。単語としてのサドマゾは1960年代からであるが、初期にはマゾサドと謂われていたようである。SMに対してMS。Windowsかい？

※物語の時代はハイパーインフレではないものの、スーパーインフレともいえるべき状況であったので、物語中で述べられる物価などは不正確である。

※進駐軍将校の英語は主人公が聞き取った通りにカタカナ表記するが、読者の理解を助けるためにアルファベットのルビ表記を追加した箇所がある。

その日暮し

ソノが、ぶらぶらと薬局の店先へ近づいていく。ふろう児が来たってんで、店番の男がにらみつくてる。ソノは店頭タナにおおいかぶさるようにして、ボタンを外したシャツのすき間から古新聞を取り出して——ヒラヒラさせながら一目散にかけ出した。

「ドロボウッ！」

店番のやつ、まんまとひっかかりやがった。ソノを追いかける。からっぽになった店先に仲間の五人がわっと取りついて、タナから雑誌を根こそぎ、ついでに店頭の商品もあれこれかっぱらって四方へにげ散る。

「やーい。もらったぜえ！」

ふつうならあわててそっちを追いかけるはずなのに、店番はソノを追いかけ続けてつかまえちまった。

「どうせ、おまえも仲間だろう。警察につき出してやる」

「くそお！ 放せよお！」

おれだって、オトナにのしかかられたら、はね返すのに苦労する。ましてソノはおれよりひとつ年下で、ガタイもきゃしゃい。

「ぼくが何したってんだよ。古新聞を持って走ってちゃいけないのかよお」

もがいてるけど、まさにムダなあがき。

「だまされないぞ。おまえがオトリになって、そのスキに万引き——なんて、可愛いもんじゃねえな」

目算がくるっちゃった。やっぱり、ソノにやらせるんじゃないかった。

「ぼくだって、去年にヤツバナレしたんだぜ。チビどものお守りだけじゃつまらないよ」

こいつは結構はしっこいから、やらせてみるかなって気になって、このザマだ。

おれは物かげから飛び出して二人にかけ寄り、店番の背中に体当たりをぶちかました。
つんのめりやがんの。

「にげるぞ！」

ソノの手を引いて小路へにげこみ、板べいの下をくぐって民家の庭から別の道へぬけた。
ガタイの大きなオトナは追って来れない。

橋下のネグラでチビどもと待っていると、三々五々と仲間が帰って来た。戦果は雑誌が十五さつと、栄養材のアンブルとか口紅とかヒロポンとか。栄養材はチビどもに分けあたえて、残りの戦利品はふるしきにひとまとめ。おれとソノと昭吾の三人でさばきに行く。

昭吾は学校を出てからずっといっしょの仲間。学校を出たといっても、卒業したんじゃない。こっちから追ん出てやったんだ。終戦になって三か月ほどして集団そ開からもどつても、親兄弟も親せきも向かえに来てくれなかった子が何人もいた。おれの両親は空しゅうで家もろとも、二人の兄は名よの戦死（けたくそ悪い）。親せきは、ムダ飯食いが増えるのをきらったんだろさ。

最初のうちは使わない教室で生活してたけど、お国からは銭も飯も出ないし、先生たちだって、自分の食いぶちすら苦しい。それに、家のある連中からはいじめられるし。

そんなおれたちをあわれんで引き取ってくれる徳志家ってのも現われたけど、選ばれるのは女子が多かった。それと、ガタイのいい男子がちょこっと。おれは選ばれなかった。

戦争が終わって何もかも自由になったんだ。独立独歩で生きてやる。おれは仲間と語らって、新天地へと足をふみ出した。同級生の昭吾と、四人の下級生。上級生は、とっくに見切りを付けてにげ去っていた。

あれから、もうすぐ二年になる。徳志家に拾われた子もいたし、他のグループへ行ったやつもいた。行方不明も何人か。多分、どっかで野垂れ死にしてるんだろうけど。一人だけ、確実に分かってる女の子がいる。

取出間サダは、おれたちの目の前で二人のG I にジープで連れ去られた。その場に居た全員でていこうしたけど、なぐりたおされた。翌日になってサダは、二キロほど上流の河

川じきで死体となって見つかった。服はぬがされて、股間は血まみれだった。

二人のG I へのにくしみは当然だけど、それよりもおれは自分のふがい無さをなげいた。そしてちかった。命にかけても取出間サダの悲劇はくり返さない、と。

消えていく仲間がいる一方で、新たに仲間になるやつもいて、今では十人の大所帯。そのうちの三人が、面どうを見てやらなきゃならない、今日みたいな仕事の戦力にならない低学年のチビども。学校を出るときは連れて来なかったけど、向こうからなついて来た子をつき放しちゃかわいそうだよな。

クツみがきやコジキもさせられない。そういうのはオトナの親方がいて、骨のずいまでしゃぶられる。親方を通さないと半殺し（ですめばオンの字）にされる。

ソノは向こうから寄って来たんじゃなくて、おれが拾ったようなもんだ。

去年の暮れ、雪が積もった夜だった。それまであらしていない商店街で裏道やかくれ場所とか下見してたとき、道ばたにでかい雪のかたまりがあった。面白えからけ飛ばしたら、やけにやわらかい。どうせゴミだろうけど、漁っておこうとほり返してみたら、●供がうまってた。

「おい、生きてんのか。おい……」

ゆさぶったら、うす目を開けた。身体が冷えきってる。動けないみたいだ。暖かい所へ運ばなきゃ。でも、おれ一人じゃ無理だ。仲間を呼んでこようか。迷っていると、そいつが情けない声でつぶやいた。

「お腹、すいたよお……」

おれは、ちょっとだけ迷った。進ちゅう軍のG I がくれたチョコレートが、まるごと一枚、ジャンパーのポケットにある。

「ギブミーチョコレート」なんて、親兄弟のカタキに物ごいなんか、おれはしないんだけど。その若い黒いやつは、おれを手招きして。

「ユーア、ベリキュート」とか言って、頭や胸や尻をなで回して、ズボンの上から金玉をつかみやがって、おれが痛いと言ったら、チョコレートをくれたんだ。なんかヤバイと直

感じたおれは、チョコレートを引ったくってにげた。やっぱり後ろ暗いことだったんだろう、そいつは追いかけて来なかった。

チョコレートなんて、見たことはあっても食ったことはない。ひとかけらだけ口に入れたら——「まるで何々のよう」なんて比喩表現はできない。とにかくあまくて別世界の味だった。さすがのおれも、仲間に内証で独りじめしたいゆうわくにかられた。

見知らぬやつにめぐんでやるなんて、絶対にいやだ。でも、チョコレートを食べ過ぎると鼻血をふくってくらいだから、精が付くんだろうな。きつと、身体も暖まるだろう。

くそお。こいつは仲間じゃないけど……サダの顔がちらつく。おれは、チョコレートをそいつの口に入れてやった。

目を丸くして一息に飲みこんじまいやんの。ま、いいか。胃ぶくろん中でとけるだろう。

「おいしい……もっと、食べたい」

おれは^{きよみず}清水のぶ台を三段重ねして、まるまる一枚、チョコレートを手ににぎらせてやった。

がりぼき、もぐもぐ、ごっくん。あつと言う間にチョコレートは無くなって。そいつは幸せそうに目を閉じた。

「おい、ねるな。こごえ死ぬぞ」

ゆすぶっても、ほっぺをぺちぺちたたいても、目を開けない。鼻に耳を近づけると、すうすうねむってやんの。

こうなったら、乗りかかった船だ。チョコレートをムダにしたくない。おれは雪の上に座り、ジャンパーの前を開けて、そいつをだきこんでやった。

ジャンパーは、オトナみたいにでかい、金持ちのボンボンがぬいだすきにかっぱらったやつだから、二人で十分にくるまれた。なんだかあまったるいにおいがしたっけ。チョコレートのおいじゃなくて、もっと心地良いにおい。

ジャンパーにくるまって、おれの体温で温めてやって——二人ともこごえ死なずにすんだ。

それが、おれとソノ——^{みはまそのお}実浜苑夫との出会いだった。以来、おれのことを『兄貴』と呼んで、男にほれた女みたいに、べたべたひつつきやがる。悪い気はしないけどな。

ただ……ふろう児のおれたちから見てもうすよごれてるしにおうし。あの夜のあまいに
おいは、おれもこごえかけててげん覚だったんだろう。夏だって川で水浴びしないし、消化器が弱く日に何回もウンコしてるけど、ふいてないんじゃないかと疑うぞ。

——そんなことを思い返しているうちに故買屋に着いた。親父は雑誌の定価と、値札の付いてる品はその値段、付いてないのは適当に玉をはじいて。ソロバンの数字は八百三十円五十銭。

「こんなところだな」

かんじょう台の上に並べられたのは拾円札が八枚。正札の一割で、は数を切り捨て。日やといの半額だぜ。まあ、●供をやとってくれる手配師なんていないし、ふろう児を相手にしてくれる故買屋はここだけだから、しょうがないけどな。

手に入れたばかりの金を使って●供用下着をいくつか買うと、たちまち持ち金は三十円を切っちゃった。

「でも、ヤミ市で買うより安いんだから。あそこに在庫があつて、良かったよね」

さっきの失敗はケロリと忘れて、はしゃいでる。まあ、それがこいつの長所なんだけどな。ソノはいつも、悪い中から良いところを見つける。暑い日は水がおいしいし、寒い日はおしくらまんじゅうで遊べる。

こんなやつが家族の中に居たら、その家は年中にこにこしてるんじゃないかな。なんて考えちまうのは、ソノには遠えんの親せきがこの街にいるから。この親せきの人に、おれは命を救われてる。

ソノを仲間に入れて二か月が経ったころ。おれはカゼを引いてねこんじまった。食べ物
は仲間が調達（かっぱらうとか）してくれるし、みんなで使っていた毛布（の残がいい）も
独りじめにさせてくれて、昭吾は薬を万引きしてくれた。でも、熱は下がらない。身体は
ふるえるし目をつむってても世界がぐるぐる回るし。せきをするのさえ苦しい。

気がついたら、物置小屋みたいな場所で残がいじやない毛布にくるまれて、そばでストーブが燃えていた。うでに点きもされてた。

翌日には熱も下がった。

「危ないところだった。肺えんで死にかけていたんだぞ」

進ちゅう軍しか持っていないペニシリンという薬がなかったら、助からなかった。おれをしん察したお医者さんが、恩着せがましく言ったけど、ありがたく恩を着ておいた。

お医者さんは、ソノの遠えんの親せきなんだそうだ。親とイザコザがあって行き来はなかったけど、きん急事態だからたのみこんでくれたんだ。

物置小屋で養生させてもらえたのは三日間だけだったけど、おれはすっかり（の半分くらい）元気を取りもどしてた。

あ、そうそう。おれはお湯にひたした手ぬぐいで身体をふいただけだったけど、ソノはフロを使わせてもらって——同一人物かってくらいの美少年に化けやがった。半月もしたら元の木あみ観あみ世あみだけどな。

それから一週間くらい、ソノはちょくちょく親せきの家へ行っては、薬とかいムとかか卵とかをもらって来てくれた。進ちゅう軍のレーションなんか、一日分の食べでがあった。こんなのを一食で平らげる兵隊に日本が勝てるわけがないって思ったね。

「小父さんちの家族になっちゃえよ」

そう言ったら、ソノはおれにしがみついて泣きやがんの。

「やだよ。兄貴とは死ぬまでいっしょだ。ぼくの命の恩人だもの」

鼻のおくがきなくさくなったけど、ふろう児と居候とじゃ、どっちが幸せか分かりきってる。

「それを言うなら、おまえだっておれの命の恩人じゃないか。チャラだよ」

「命の恩人を見捨てるつもりかよ。ぼく、絶対にいやだからね」

メチャクチャな理くつ。よっぽど、その親せきとは仲が悪いんだろう。そう思ったから、その話はやめにした。

ので、今もソノはおれたちの仲間ってわけだ。

浮浪児狩込

小さな足音を聞きつけて、目が覚めた。女の子をさらうやつもいるし、弱い者いじめを面白がるやつもいる。だから、おれたちはねむっているときも野生の動物みたいにカンが研ぎすまされている。

足音はあちこちから聞こえる。包囲されてる。ということは、小人数の人さらいとか気まぐれでおそってくる連中じゃない。おれはねてるふりをしながら、やみの中で目をこらした。制服姿の警官が二人と私服が五人。五人はけい事と役所の人間だろう。百メートル先の土手にはトラックがヘッドライトを消して停まっている。

おれは包囲もうがせばまるのを待ってから、はね起きるなり、川岸にいちばん近い私服に体当たりをかましてやった。そのまま馬乗りになって。

「起きろ！ カリコミだぞおお！」

敵の二人が、おれを引っぺがそうと寄って来た。

仲間はねぼけまなこをこすりながら、包囲もうに出来た穴からにげ散ろうとする。

「こらっ、待て！」

「市役所の者です。きみたちを保護してあげます」

「よし、つかまえた！」

声のほうを見ると、五メートルばかりはなれたところで、大きなかげと小さなかげとがもつれ合っている。そこへ、もうひとつの小さなかげが飛びかかって。小さなかげが入れ代わった。

「一名、確保！」

そんな声が聞こえたときには、他の仲間の姿はやみの中に消えていた。

つかまったのは、おれとソノの二人だけだった。こんなときまで、おれにひっついてやがる。

おれとソノはうでを後ろへねじられて、トラックまで引きずられて行った。トラックの荷台におしこまれて、足をくさりにつながれた。これが『保護』かよ。

トラックで連れてかれたのは警察署。下ろされるなり、マスクをしたやつに頭からDDTをふき付けられて、全身真っ白。ケホケホせきこんでも知らん顔。あざ笑われるよりはマシだけどな。

二人まとめて取調室へ入れられて。

「名前は、年は？」

「^{しおだしんぞう}塩田真三。●二才。両親は空しゅうで家もろとも焼かれて、二人の兄はサイパンと特こうだよ。ついでに言っとくとムダ飯を食わせてくれる親せきなんていないぜ。けい務所でも収容所でも、どこなりとぶちこめよ」

ふうう児専用の学園があるけど、お国から金も出てるけど、職員がネコババしてやがる。勤労ほう仕よりもこき使われるって、にげて来たやつから聞いたことがある。

「引き取り手が名乗り出ても、帰しはしない。公務しつ行ぼう害の非行少年にふさわしい所へほうりこんでやる」

こいつ、もしかすると体当たりですっ転がしたやつかな。けい事がガキにあしらわれちゃあ、面目立たねえもんな。

「キチク学園ですか」

別の小机で記録を付けていた若いやつが、おれを取り調べていた中年のけい事にたずねたのか、確認したのか。

「ああ。けっこう整った顔立ちをしてるから、もしかすると売れっ子になるかも知らんぞ」

訳の分からないことを言って、二人して顔を見合わせて、うすら笑い。

「こっちのガキもキチク送りだな。きゃしゃだし、案外と可愛いぞ」

ソノが可愛いって、こいつら目がおかしいんじゃないかと思ったけど。DDTで顔が真

っ白だから、お人形さんみたいで——ふだんのアカまみれとは、ずいぶん印象がちがっていた。

ソノにも型どおりにおれと同じ質問がくり返されて。ソノは遠えんの親せきのことは何も言わなかった。

簡単な取り調べが終わると、二人まとめて独房へ放りこまれた。オトナ用だから●供二人でもせまくはない。風にふきさらされない屋根付きの場所でねむるなんて、去年の暮れの死にかけたとき以来だった。

収容所での生活だって、橋の下よりは快適だろうさ。オトナにあれこれ指図されて、逆らったらセッカンされるのをがまんすればな（出来るもんか！）。

その日暮らしが身にしみ着いてるおれたちは、明日のことなんか考えずに、寄りそってうちにいつかでき合って、安らかにねむったよ。それが、生がい最後の幸せな一夜になるなんてことは知らずにね。

翌朝は、内輪もめ(?)から始まった。

「絶対に見るなよ」

ソノのやつ、すごい見幕。独房だから、便所なんてなくて、オマルみたいなやつ。部屋の中でも鉄格子の向こうからも丸見え。

「男がクソしてるとこなんざ、金をもらっても見たかねえやい」

「女だったら見るのかよ。兄貴の変態」

「朝っぱらからうるせえぞ」

雑居房からしかられちった。

出す物を出したら、入れる物をちゃんとあたえられた。イモと雑穀のおかゆだけど、ふだん食ってる残飯よりは百倍くらい、ヤミ市のうどんの次くらいにうまかった。次からは、わざとつかまってぶちこまれてもいいかなって思ったくらいだ。思っただけで、自由を手放すつもりなんか、ねえけどな。

飯を食った後は、またトラックに積まれて、ぼろっちい建物に連れてかれた。そこがキチク学園かと思ったら、そうじゃなくて。つぎ当てだらけだけど、こざっぱりした服を着た女子が二人、積みこまれた。

その建物はかん別所といって、つかまえたふろう児をどの学園へ送るか決めるし設だった。キチク学園というのは、特に非行けい向の強い問題児を收容するし設だと、二人の女子といっしょに荷台へ乗りこんできたジジイが教えてくれた。

「実際には、身寄りがまったくないなくて、ツパナレはしておるが声は変わっていない子を選びすぐっておるがな。これがどういう意味かは、まあ、すぐに分かるさ」

弟分の正体

おれたち四人は一時間以上もトラックで運ばれて、着いたのは山の中にあるカマボコ形の兵舎だった。進ちゅう軍が使ってるやつだ。余じょう物資のはらい下げってやつだろう。兵舎は二つ並んでいて、しき地は鉄条もうで囲まれている。ただ一つの出入口には木の看板がかかげられていた。

浮浪児矯正收容所

県立木竹学園

確かに●供向けのし設かもしれない。庭の片すみにはブランコやすべり台も置いてある。

おれたちを待ち構えていた三人のオトナに引きわたすと、トラックはすぐに引き返して行った。引率だか見張だかのジジイは、そのまま残った。

「そこに並べ。一列横隊」

男が右で先頭は背が高いおれ。

身体のがっしりした、軍事教練の教官みたいな中年男が、おれたちの前に立った。戦時中の国民服か陸軍の第三種軍装みたいなのを着ている。

「わしが所長の濃閑宇佐治だ。わしの命令は絶対だと心得ろ」

この人、まだ戦争を引きずってるみたいだ。天皇陛下だって、人間宣言をされたっていうのに。

「わしや教官に逆らう者には、厳しいチョウバツをあたえるぞ。覚悟しておけ」

いきなりおどしつけやがってから、引きわたし書類と名前の照合。かん別所の二人は大きいほうが京有ツマ、小さい（といっても、ソノと同じくらい）のが石関貞女だと知った。

そして、職員の手洗い。

コンクリブロックのどう体にレンガの頭を乗せたようなのが、職業と体育指導の常持好男教官。ネルのシャツに所長と同じズボン。トラックのジジイが帆針丈夫教官で、元は中学校の先生。よれよれの背広を着ているが、ネクタイはしていない。ダルマさんをちょこっとだけ細くした中年の小母さんが道庭コノミ教官で、給食の責任者。だからか、かすりの着物に割ぼう着だ。

これで全員らしい。

「では、先ばいの生徒をしょうかいする」

所長が回れ右をして、兵舎（校舎かな）に向かって大声で号令。

「生徒はああ、全員集合ッ！」

左側の校舎から、ぞろぞろと……

「えええっ!？」

大声が出てしまった。男子はみんなぼう主頭で、女子はオカッパ。なのは普通で——驚いたのは、全員が裸だったことだ。股にポヨポヨと毛を生やしてる子も、おっぱいがふくらんでる子も、すっぱんぽん……じゃなかった。よく見ると、男子は玉とサオを灰色のふくろみたいな物で包んでいる。女子は腰に細い茶色の縄を巻いて前で垂らして、割れ目に食いこませている。

「服を着せると、洗たくやらツギハギやらで金がかかる。おまえらはフンドシー一本で十分

だ」

あれって、フンドシじゃないと思う。

そりゃ、そ開する前の学校でも、銃後の守りは健康な身体からと言って、真冬でも上半身はぬいで授業を受けて、雪の降る校庭でかん布まさつもさせられたけど。男子はズボン、女子はモンペをはいてた。こんな真っ裸で、チンチンや割れ目をかくしてるんだか強調してるんだか分からない格好はさせられなかった。

「お前たちも素っ裸になれ」

その声で、おれは我に返った。

「そんなの無茶苦茶です」

かん別所からトラックに乗せられた子の一人が、金切り声を上げた。

コンクリブロックが、その子の前に立って、持っていた竹刀でたたいた。

バチイン！

「きゃああっ！」

女の子は胸をおさえてうずくまった。

「反こうは許さんと所長どのがおっしゃったばかりだぞ」

バチイン！

バチイン！

後ろへ回りこんで、立て続けにお尻をたたく。

「ごめんなさい！ ぬぎます。もう、たたかないで！」

コンクリブロックがたたくのをやめて、うずくまっている女の子の足の間に竹刀の先をこじ入れた。

「さっさと立て。自分で言ったことを実行しろ」

女の子は泣きじゃくりながら、服をぬいだ。もう一人の子もぬぎ始める。

ぎろり。コンクリブロックが、おれをにらんだ。

小母さんとジジイだけなら、への河童だけど、元将校（だと思う）とコンクリブロック

には敵わない。女子だってぬいでるんだ。はずかしくなんかないぞ。けど、おれはまだポヨポヨじゃなくてツルツルだし、オトナみたいにズルムケじゃない。どころか、今は縮かんで朝顔のつぼみだよ。

「かくすな。気ヲツケッ」

軍事教練でたたきこまれた反射で、背筋をのばして直立不動——なのは三人だけだった。

ソノは服をぬごうとはせず、泣きそうな顔でつつ立っている。

コンクリブロックが見のがすはずがない。ソノの前で竹刀をふりかぶった。

「ソノ、ぬいじまえ。みんな裸だ。はずかしいことなんかない」

女の子みたいに両手で胸をかかえて、イヤイヤをする。ソノがおれの言うことを聞かなかったのは、これが初めてだ。

ズバッチイン！

前の子よりも大きな音。

ソノは胸をかばったんだけど、竹刀は腹にたたきこまれた。

「ぎゃぶふっ……！」

悲鳴とげっぷを重ねたような声でうめいて、地面に丸まった。

ズバッチイン！

ズバッチイン！

ズバッチイン！

何発もお尻をたたかれて、それでも降参しないものだから、コンクリブロックのやつ、背中やわき腹までたたき始めた。

「待ってくれよ。おれが言い聞かせるから」

コンクリブロックが、おれに向き直った。

「だれに物を言ってるんだ。教官どのと呼びかけて、常に敬語を使え」

「……はい、気をつけます」

おこらせるのは得策じゃないから、腹綿をにえくらかしながら謝った。

おれが割りこんだんで氣勢をそがれたんだろう。コンクリは竹刀を下ろした。

「よーし。女子全員で、こいつをぬがしてしまえ。服は破ってもかまわん」

そんな無茶な命令にだれが従うもんかよ——てのは、ここのことを知らないおれの目すりだった。十人くらいの子がかけ寄って、服を引っ張ったり、暴れるソノを羽交いじめにしたり。

「やめろ！　ぼくにさわるな！　やめてよおお……」

もともとボロボロに近かった服が引き千切られて完全なボロボロになって……

「ええっ？」

「やだ。女の子だよ」

「なあんだ。じゃあ、男子の出番だったんだ」

群がってた女子が散って、ひとり取り残されたソノは両手で胸と股をかくしている。

「気ヲツケッ」

号令をかけられて。ソノは、おれをちらっと見てから、おずおずと両手を下ろした。

まさか、まさか、まさか……ソノは、ほんとうに女の子だった。ふっくらした股の間にぽよぽよもちんちんもなくて、縦の一本筋になっていた。それに、胸もちょっぴりふくらんでいる。

おれは、何がなんだか分からなくなった。

「これは……」

教官たちもあつけに取られている。ジジイが書類をめくって。

「^{みはまそのお}実浜苑夫というのはウソだな。本名はなんというのだ」

「……^{みはまそのこ}実浜苑子です」

「声が小さいっ！」

コンクリにどなられて、ソノが大声で言い直した。

「実浜苑子ですっ！」

おれを見て……顔を赤くしてやんの。なんでだろ？

なぜ男子の格好をしてたとかは追究せずに、コンクリはおれたち新入り四人を鉄条ものの前へ並ばせた。ソノもていこうをあきらめて、素直に従う。

しき地のすみにある物置小屋から真っ赤な消火ポンプが引き出されて、エンジンがかけられた。

所長がホースを引きのばして、太いノズルをおれたちに向けた。

「気をつけのまま、動くんじゃないぞ」

ぶじゃああああっ……

水道とは比べものにならない太い水流が、おれたちにおそいかかった。

「きゃああっ……」

「痛いっ、やめてええ」

女子二人が悲鳴を上げた。ソノは無言でおれにしがみつく。

所長は列を乱したソノをとがめなかった。その代わり、おれとソノに水流を向けて、頭からつま先まで水を浴びせ続ける。

まるでやわらかなこん棒でなぐられているようだ。やわらかいけど痛い。それよりも、息を止めていないと水を吸いこんじまう。それでも、なんとか息つきをして。

「だいじょうぶだ、おれがついてる」

水流からかばってソノをだきしめたんだけど、ますます所長をおこらせたみたいだ。一メートルくらいまで近づいて、おれとソノを水圧で引きはがそうとする。

おれは、いっそう強くソノをだきしめる。

ポンプの水そうが空になったんだろう。じきに放水はやんだ。この学園（強制収容所だ）での、数少ない勝利のひとつだった。

そこで、おれは二度目のびっくり。DDTの白い粉もこびり付いていたアカも洗い流されたソノは、水もしたたる（ふざけてる場合じゃないけど）美少女だった。ソノの親せきの医者ん所では美少年に化けたけど、それ以上の変わりようだった。男のくせにきゃしゃな造作だと思ってた顔つきが、女の子だと思って見ると、小ちんまりと整ってる。おれた

ちって健康優良児からは程遠いから、ほほがちよっとこけてて、ソノの顔はおとなびて見える。可愛ってより美女そのもの。ソノは十一月生まれだと言ってたから、七月生まれのおれよりも一年四か月下だけど、今なら●学生だって言われても信じてしまいそうだ。

男の子の格好をしてくれてて良かった。そうじゃなきゃ、昭吾と取り合いになっていたかもしれない。やつと仲たがいはしたくないもんな。そうだ、にげおおせた仲間のことは、昭吾が仕切ってくれるよな。

おれたち四人はぐしょぬれのまま、ミカン箱を並べた台の前に並ばされた。横に所長と小母さんが立って、まわりを三十人ほどの生徒が取り囲む。コンクリとジジイは円の外で見張の役割らしい。

「おまえは列外だ」

おれだけが引きはなされて、取り囲んだ生徒の列に入れられた。

「これから、女兒の純潔検査を行なう」

かん別所で合流した二人のうちの年少のほう、ミカン箱の上にねかされた。ひざを立てて足を開く。女の子にはすごくはずかしい姿勢だろうけど、逆らったら竹刀でめっ多打ちにされるから、真っ赤な顔を両手でかくして命令に従っている。

小母さんがしゃがみこんで股倉をのぞきこんだ。割れ目を指で左右に開いて。

「きれいな処女まくです。厚めだから、さぞやとの方を喜ばず悲鳴をあげるでしょうね」
どういう意味だろ。

二人目の女の子も、純潔検査とかいうのに合格したらしい。

そして、ソノの番。ソノもあきらめて言いなりになっているけど、顔を手でかくしたりせず空を見つめている。

「んまあ……破れているどころか、あと形もないですわ」

小母さんが割ぼう着からスリコギを取り出した。

「いくらなんでも、かわいたところにズブリじゃかわいそうだわね」

ぺっぺっと、ソノの割れ目にツバをはきかけた。そして、スリコギを割れ目におしこん

だ。

「さすがにきついすわ。まあ、この年ですんなり入るようでしたら、ふろう児の仲間になんかなっていないでしょうよ」

ぐりぐりとねじりながらスリコギをさらにおしこむ。

「く、くそお……」

ソノが両手をにぎりしめる。痛いんだろうか、くやしいんだろうか。

「そんなに使いこんではいけないね。せいぜい二人か三人、それとも一人と何回か。最初に男とやったのは、いつなの？」

「……………」

ソノは答えない。

おれは、おれで——小母さん（じゃないや。ソノにひどいことをするババアだ）の言葉の意味が、なんとなく分かってきた。あの太いスリコギは、オトナのチンチンの代用品じゃないんだろうか。『オマンコする』って言葉は、そ開中に聞いたことがあるけど、それって、こういうことかな。

と、そこまで分かって。ソノの遠えんの親せきって人を思い出した。親せきでもなんでもなかったんじゃないか。ソノはあの医者にオマンコさせて、その見返りで、おれを助けてもらったんだ。そして、食べ物ももらっていたんだ……おれのために。

おれのバカやろう。たった一枚のチョコレートの恩返しに、ソノは百倍も万倍ものことをしてくれたんだ。

「まあ、いいわ。いくら可愛くても、こんな強情な使い古しはお客様の気元を損ねるだけでしょう。それなりの使い方を所長先生も考えてくださることでしょうよ」

つまり、ソノは純潔検査に不合格ということらしい。

全裸に焼印

おれは、また女子三人の列にもどされた。まだ、何かされるんだ。

ミカン箱の横に大きなバケツが置かれた。中では石炭が真っ赤に燃えている。

「回レー右ッ」

おれたちを取り囲んでいる生徒たちが、いっせいに尻を向けた。

おれは、また（何回目だろう）度ぎもをぬかれた。みんなの右の尻の上に、ミミズばれみたいに肉が盛り上がった。丸の中に『木』の文字が書かれてる。

所長が、火かき棒みたいのをおれたちに見せつけた。先っぽにはうすい鉄板を切りぬいた『木』の文字がくっついてて、その周りを太い針金が円形に囲っている。焼印だ。

「おまえたちは、事あるごとにだっ走しようとかくらむからな。素っ裸にして焼印を付けておけば、街中にまぎれこむことも出来まい」

月に五人は出ていだっ走者がゼロになったと、所長は自まんしやがった。

「では、強情なアバズレからだ」

所長がソノに指をつき付けた。

ミカン箱の上でうつぶせになれと言われても、従えるはずがない。焼印よりは竹刀のほうが、まだマシだ。

「ちっ。お前たち、こいつをおさえつけておけ」

今度は男子ばかりがソノに群がって、たちまちミカン箱の上にねじふせた。

「くそっ、やめろ。変なとこ、さわんな」

何本もの手がソノの尻をなでたりつかんだり、足の間に差し入れて割れ目をつついたり、胸の下に強引に差しこんだり。●供がそういうことをしたらしかるはずのオトナは、面白そうに笑ってながめてるだけ。

「やめろ！ ソノは許してやってくれよお。二つでも三つでも、おれに焼印を付けてもいいから！」

「おまえには、最後に念入りに焼き付けてやる。それまで、おとなしく見学している」
パチン！

コンクリに尻をたたかれて、おれは自分の無力さを痛感した。助けてやりたくても助けられない。竹刀でたたきのめされるのは分かりきってる。

さわぎが治まったのは、真っ赤に焼けた火かき棒がバケツから引きぬかれたときだった。四人の生徒がソノの手足をつかんで、二人が左右から腰をおさえ付ける。真っ赤に焼けた焼印が、右の尻が腰につながってるあたりに近づいて。

じゅううっ……

「ぎゃああああっ！」

ソノが絶きょうした。

焼印はすぐに引きもどされて……尻から青白いけむりが立ちのぼった。肉のこげるにおいが鼻のおくにこびり付いて消えない。

ババアが火傷の上に水をかけて、それが手当のつもりなんだろう。

生徒が手を放しても、ソノは起き上がらなかった。コンクリに引きずり下ろされて、そのまま地面につつぶして泣きじゃくっている。

おれが近づいても、コンクリも所長も何も言わなかった。ので、何もできないけど、背中をさすってやった。弟分じゃなくて、裸の女の子の肌をなでていると思うと——不きんしんだけど、チンチンが固くなってくる（ちょびっとだけだぞ）。

後の二人の女子はていこうしなかったけど、やっぱり寄ってたかっておさえつけられて、すぐに焼印をおされたから、生徒にあまりさわられなかったけど、ソノと同じかそれ以上に泣きさげんだ。

そして、おれの番。何人かの女子が近づいてきたけど、おれは自分でミカン箱に上がった。

「おさえつけなくても、動いたりするもんか。おれは男だ。焼印なんかこわくないぞ」

タンカを切る言葉がふるえてるんだから、どうにもコッケイだけど。出来るだけ堂々と、うつぶせになった。まな板の上のコイ、ミカン箱の上の真三様でい。

焼印が近づくだけで、肌がチリチリ焼けるようだ。

じゅうううううっ……

「ぐぎいいい……」

歯を食いしばって悲鳴をこらえた。ちっとも熱くなんかないぞ。すごく痛いだけだ。無数の針をつき差されて、えぐられてるみたいだ。

他の子の三倍くらいは長くおし付けられてたと感じた。さっ覚じゃない。所長は「念入りに」と言っていたからな。

これでようやく、入園のぎ式だか検査だか処置だかが終わった。

おれは、他の男子が着けているのと同じふくろみたいなフンドシみたいな『制服』をあてられた。コンクリの指導を受けながら、自分の手で自分を裸よりもはずかしい格好にしなければならない。

チンチンは皮の先を内側へまいて先っぽを中へおしこんでから、ふくろをかぶせて口のヒモを左右に引きしぼる。こんなことをしてたら、いつまで経ってもむけないよ。

他の生徒を見ただけじゃ分からなかったけど、これで終わりじゃない。根元に穴の明いた木の棒をヒモに通す。木の棒は長さが十センチくらいでと中がふくらんでいて、えん筆を四本束ねたくらいの太さになってる。これをこう門につき差す！

生徒は便所の時間まで厳しく定められている。チンチンをふくろに包んでこう門を木の棒でふさげば、教官の目をぬすんで野グソはもちろん立ちションも出来ない。

ヒモは後ろで結んで左右に分け、太腿の付け根に沿って前へ回し、余りはチンチンの根元に巻き付けてチョウ結び。

実際に着けてみると、金玉を常にわしづかみにされてるような感じで、皮のおくまでおしこんだチンチンの存在も強調される。何より、こう門につつこんだ木の棒が気色悪い。

「そのうち、もっと太いのを入れてほしくなるぞ」なんて所長は言うけど、そんなこと、あるもんか。

男子は、何だか変な感じくらいですんでるけど、女子はとても変な感じらしい。

木綿の縄で腰を巻いて前で結んで、縄はヒモよりも太いから木の棒には縦長の穴が明いてる。男子と同じように縄を後ろへ引き上げて、そこで腰を巻いた縄に結び留めるんだけど。割れ目にうめる縄は、オシッコのふたになる結びこぶを作らなければならない。こぶの数は一つだったり三つだったり、一人ずつちがう。ソノは非処女のアバズレだとか言われて、四つも作らされた。割れ目の上はしからはみ出してしまう。フンドシをしめたソノは顔を上気させて、身体をもじもじさせてる。

その仕草がすごく女の子っぽくて、おれはチンチンがふくろの中でつつ張らかっちまって、ちょっと痛かった。

最後に、みんなと同じようにぼう主頭とオカッパにかみの毛を切られたんだけど。ソノにとっては、これが一番残こくな仕打ちだったんじゃないだろうか。

「おまえは男のなりをしていたんだ。マンコが付いているのだから縄フンドシはやむを得ないが、頭くらいは男にしておいてやろう」

バリカンで丸ぼう主にされちゃったんだ。

さからうごとに竹刀でたたかれたり男子に寄ってたかってオモチャにされてきたから、もうあきらめて、ソノは静かにしていた。目からぼろぼろなみだをこぼしながら。

ぼう主頭にされたソノは、顔だけを見ると美少年だけど、胸はすこしふくらんでるし割れ目に縄は食いこませてるし、体つきだって女の曲線になってるし——ひどくアンバランスで、それが不細工どころか、男でもない女でもないあやしいフンイキだった。

空砲の恥辱

おれたち四人も先ばいの生徒といっしょにカマボコ形のろうごくへ入れられた。こんな場所、兵舎でも校舎でもあるもんか。

中は縦方向に三つに仕切られている。

ひとつは教室。おなじみ（といっても、おれにとっては一年ぶり）の机とイスのセットが五十ほども縦横^{たてよこ}に並んでいる。イスに革のバンドが取り付けられてるのは、生徒が勝手に動き回らないようにするためなんだろうな。でも、座面にスリコギがつき出ているイスが、いくつかあるのが不気味だ。さっきの純潔検査とかで、どういうふうに使われるのか、想像できてしまう。スリコギが一本のと二本のとがある。一本のやつが男子も座れるのは、こう門につき差さってる木の棒で明らか。でも、なんだって、こんなふうに●供をいじめるんだろう。

軍隊の教育といっしょかな。新兵を古兵がいじめぬいて、いざ戦場では、どんなに理不尽な命令にも忠実に従う兵隊を作り上げるっていうやつ。戦争が終わって一年も経つと、昔は絶対の秘密にされてた事がらでも、風のうわさがふろう児にまで届いてくる。

教室の反対側のはしっこは、小さな保健室。身長計と体重計と病人用のベッド、あとはせいぜい救急箱くらいが置いてあるそうだ。

ろうごくの真ん中は、しん室になっている。進ちゅう軍の放出品らしい金属パイプで組み立てられたベッドがずらっと並んでる。ベッドには布団とかマットなんて気の利いた代物はなく、分厚いベニヤ板がしかれているだけ。ベッドの前後に五十センチほどの高さでつき出ているワクにも革のバンドが付いていた。嚴重過ぎるだっ走防止策だ。ねむるときまでこう束されるんだ。

だけど、ベッドは二十台しかない。生徒というか収容者は、正確には新入りのおれたち

をふくめて、男が二十一人と女が十三人。あぶれたやつは、ゆかにねかされるのかな。

「二人でひとつのベッドにねるのさ」

先ばいにたずねたら、もっともな答えが返ってきた。日本人のオトナより大きなG Iに合わせたベッドだもの、●供なら三人川の字になれる。それにベッドはぴったりくつつき合ってるから、転げ落ちる心配もないね。

ふだんは日曜も休日もなく、朝から夕方までは学習か職業訓練に当てられるそうだけど、今日は一気に四人も新入りがあったので、教官はその受け入れ手続き（書類とか、しこたまあるんだろう）にいそがしいので自習。

みんな、ベッドの板じきにボロボロの教科書とか広げて真面目に勉強している。もちろん、遊んでるやつもいるけど。いくらでもガンを付けられそうなよれよれよトランプとか、本気ビンタの『あっち向いてホイ』とか、女子は可愛らしくオハジキとか。本を読みたくても、教科書と古新聞しかないそうだ。

男も女も部屋はいっしょくただから。おれはソノと並んで部屋のすみにうずくまって、みんなのすることをながめてた。これからどうなるんだろうなんて、無意味なことは口にしない。悪いほうへはいろんな転がり方があるけど、良いほうへ転がることなんてないんだから。

昼になっても食事はもらえなかった。給食は朝と夕の二回だけだそうだ。

「味さえ気にしなけりゃ、たっぷり食わせてもらえるぜ。ここには、味を気にするやつなんかいないしな」

元はみんなふろう児だったんだから、たっぷり食べさせてもらえるんなら言うことはない。だけど、それはおれたちの健康を気づかっただけの処ぐうじゃないって、じきに分かってくる。おれたちが骨と皮じゃ、所長の都合が悪いんだ。なんて、先の話は後ですとして。

時計がないから正確な時刻は分からないけど。せいぜい午後二時くらいじゃないかな。おれだけが、となりのカマボコへ呼び出された。

こっちは教官用の個室が六つと、反対側のはしっこに大きな台所。残りはがらんとした広間。

おれが呼ばれたのは、ババアの個室だった。四じょう半より、ちょっとせまい。ベッドと整理だんすと書き物机と。整理だんすの上には西洋人形とか造花とかがかざってあって、なにより空気が女くさい。ババアに似合わない好いにおいだ。

ほんとは、ババアなんて失礼だよな。間近で見ると、三十才くらいかな。おれらには二十も四十も同じようにしか見えないから、自信はないけど。でも、こいつがババアなのは、見た目じゃない。ソノにひどいこと——と言っても、コンクリみたいな暴力とはちがう。そうだ、はずかしめってやつだ。ソノをはずかしめたから、ババアなんだ。見た目は（ちょっとおまけしてやりゃ）お姉さんでもいけそうだから、若ババだ。

「なに、じろじろ見てるの？」

若ババの声は、とがめてる感じじゃなかった。

「え、いえ……小ちんまりと片付いた部屋だなんて」

「小ちんまりなんて、おとなぶった口を利くのね。もっと近くへ寄りなさい」

二度三度と手招きされて、ベッドに腰かけている若ババと、ひざがくつつきそうになった。

この人、外で見たときと全然ちがう服装をしている。えり首のゆるいセーターだもんで、立っているおれからは、おっぱいの上半分がのぞけてしまう。セーターのすそは太腿まであるけど、スカートをはいてない？

「チンぶくろなんか、取っちゃいなさい」

へえ、『チンぶくろ』ていうのか、これ。教官の命令は絶対だし、チンチンなんかさんざん見られてるし。手間取ったのは、はずかしいからじゃなくて、ヒモがほどきにくかったからだ。あ、でも……木の棒をぬくのは、はずかしかった。

「見せてごらん」

若ババが木の棒をひったくって、鼻に近づけてにおいをかいだ。

「くさい物はくさいわね」

分かってんなら、かぐなよ。

若ババはちり紙で木の棒をぬぐってから、ゆかへ放り投げた。

拾おうか迷っているひまはなかった。

「なあに？ まだ縮こまっているの？」

若ババが、おれの股間に手をのばした。

反射的に後ずさったら、しかられた。

「にげるな。男の子にも純潔検査はあるよの」

若ババが、縮かんだチンチンをつまんで、くにゅくにゅとしごいた。皮の先っぽをつまんで指をすぼめると、中身がにゅるんとおくへ引っこむ。指をゆるめると元にもどる。

それを何度もくり返されるうちに固くなってきて、引っこまなくなった。

若ババは指をすぼめるのをやめて、前後に動かし始めた。

皮ごしに中身をしごかれて……すごく気持ち良いっていうか、腰のおくが切ないとしか表現できない。こんなの、初めてだ。チンチンが小さなスリコギみたいに固くなって、若ババが指を動かすたびに中身が顔をだす。

「検査の準備が出来たみたいね」

若ババのやつ、いきなりセーターをぬいだ——ら、下はすっぽんぽん。

「……………？！」

「おいで」

ベッドに横向きにねて、手招きする。

わけが分からないままベッドに上がったら、手をつかんで引きたおされた。おっぱいが目の前。

まん丸で、ぱんぱんに張りつめてて、グミの実みたいに大きな赤むらさき色の乳首。

「男の子の純潔検査はね、ぼっ起したインケイをここへ入れるんだよ」

若ババが、女の子が検査を受けたときと同じ姿勢になった。でも、大きなちがいがあつ

た。ツルツルじゃなくてポヨポヨでもなくて、モジャモジャ。オトナの男がそうなんだから、それは当然だけど。割れ目からニワトリのトサカみたいのがはみ出てる。それが二つに割れて、とろっとしたミツみたいのがにじんてる。おしっこじゃないよな？

インケイって言葉は知らないけどぼっ起は分かるから、チンチンのことだろう。女の割れ目にチンチンを入れるのが『オマンコする』ってことらしいと理解したのは今日のことだ。ミソカゴトとかヒワイとか、そういうのと結び付いてるってのは、自然と分かった。ソノへの純潔検査を見てると、女の子にとっては、とてもはずかしくてつらいものらしいというのも分かった。だけど男は、はずかしくても楽しいんだろう。そ開先の男衆おとこしの口ぶりを思い出してみると、そうとしか思えない。

だけど、自分にはつらいことを、生徒のために率先するようなタマじゃないのは、ソノをいじめたことだけを見ても明らかだ。

おれは、とまどいながら身体を起こして——チンチンを割れ目に入れるって、どうやればいいのか分からなかった。

「なに、ぐずぐずしてるのよ」

「あの……どうしたらいいか、分からなくて」

「あら、まあ。それじゃ、イチから教えてあげるわね」

言われるとおりに、若ババ（じゃなくて、お姉さんって呼びたくなった）の上で四つんばいになって、チンチンを割れ目にあてがって、ぐっと腰を落とす。

に`ゆる`んって感じで、チンチンがどこかにもぐりこんだ。そこはすごく温かくて、なんだかうのようにチンチンにからみ付いてくる感じで、すごく気持ち良い。

「入ったわ。うまいじゃないの。腰を上下に動かして、インケイを出し入れしなさい。キトウがぬけないように、サオだけをぬき差しするの」

言われたとおりに動いたら、気持ち良いのがチンチンをさかのぼって来て、腰のおくでばく発した。

「あっ、あああっ！」

ばく発はいっしゅんで、チンチンがびゅくびゅくってけいれんして——全身から力がぬけて、お姉さんのやわらかな身体の上にのし上げちゃった。

お姉さんがごろんと横向きになって、おれをつき放した。

「あら……？」

おれのチンチンを見て、顔をしかめた。自分の指でオマンコをかき回して。

「なによ。空ほうじゃない。おまえね、インケイから白いおしっこを出したことないの？」

「……………」

おしっこが黄色じゃなかったら病気だろ。

お姉さんはこわい顔でおれをにらみつけた。やっぱり、若ババだ。

若ババは裸のままベッドから下りると、机の引き出しをかき回して、小さなスリコギときみょうな針金細工とを取り出した。

「私をコケにしたバツよ。精通するまで、これを着けときな」

うげ……？

スリコギは分かる（けど、いやだ）。木の棒に代えて、これをこう門に入れろってんだろ。不可能じゃないと思う。これよりも太いウンコをすることだってある。

ただ針金細工は、どこにどうやって着けるんだろう。輪っかになってて、円が一周したところから針金が直角に折れ曲がり、五センチくらいで『し』の字形に折り返して。折り返してる部分のほうが長いから輪っかをつきぬけて、その部分は針金を何重にも折り曲げて直径一センチくらいになったのをハンダ付けしてある。

「おしっこをするときも外すんじゃないよ。でこぼこの間からもれるようにしてあるから」

若ババはベッドに腰かけて、前におれを立たせた。チンチンをむぎゅっと引きのばして、太くなってる先っぽをおしっこの穴におしこんだ。

「あちっ……」

びくっと腰を引いたけど、チンチンを根元からにぎられてるので、にげられない。直径一センチのでこぼこした金属棒がチンチンにおしこまれていく。痛いんじゃないくて、チリ

チリと熱い。なのに、くすぐったいような、さっきのばく発にも似てるような気持ち良さが混じってる。

折り返してる部分は円の中心になってるから、おしこまれていくにつれてチンチンが針金の輪っかをくぐる。

「痛たた……」

金玉まで一個ずつ（無理矢理に）輪っかをくぐらされた。若ババが手を放しても、ぬけ落ちない。おしこまれた後は、ほとんど痛みを感じなかった。すごく変な感じが、女子が着けさせられた縄フンドシよりも強い——かどうかは、永遠に分からない。女子はチンチンの輪っかを着けられないし、おれは縄フンドシをしめられないから。

このへんてこな輪っかを着けたまま、チンぶくろを上からかぶせると、前が異様に盛り上がる。

スリコギは自分で入れなければならなかった。ソノの純潔検査に使われたのより細くて、直径は二センチ半くらいだけど、こう門もいっしょにおしこまれて、筋肉がつっ張って目茶苦茶に痛い。

ぬらそうと思って指につばをはいたら、しかられた。

「横着しないの。口にくわえて念入りになめるのよ」

言われたとおりにしたら、にまにましながらおれの口元をながめてる。変なババアだ。

つばでたっぷりぬらしても無理だった。

ゆかに垂直に立てて、手でスリコギを支えながら腰を下ろせと指導されて、やってみたら一発で出来た。ずぐうっとつき上げられるような感覚はあったけれど、そんなに痛くなかった。きっと、おしこむ角度が悪かったんだろうと、自分で納得した。

前はつつ張らかせて、後ろはスリコギのはしっこが見えていて。そんなおれの姿を見て、きょとんとしたただけなのが、かん別所組の女子。ソノは、うつむいて顔を赤くした。古株の連中は男子も女子も、なんかバカにしているような目つきだった。

「道庭教官をおこらせちゃったな。暴発させたのか。まさか出来なかったんじゃないよな？」

一番の年長者で小山大章^{こやまひろあき}というやつが、大声で聞いてきた。

「どうでもいいだろ」

ほんとのことを答えると、もっとバカにされると直感したので、ケンカ腰になっちゃった。

「たしかに、こっちにとっちゃどうでもいいことだな。いや、ありがたいぜ。せいぜい、道庭教官に可愛がってもらえよな」

男子がいつせいにうす笑いをうかべた。ここには、ツバナレしたばかりの子も収容されてるけど、そいつもだ。どうも、この学園ていうかきょう正収容所というよりも強制収容所は、得体の知れないところだ。

夜通し拘束

朝のおかゆに小さな干物が一枚加わったのが、夕食。おかゆってのは、あんまり腹持ちがしないんだよな。

夕食後は自由時間で、教室としん室は行き来できるけど、建物のドアは外からカギをかけられてるし、窓には鉄格子。二つの部屋で過ごすしかない。おれもソノも、ここの連中とはまだ打ち解けてないし、勉強もおくれてるから、みんなのじゃまにならないよう、教室のすみっこで二人くっつきあって、うす暗がりの中で教科書を読んでいた。

ソノが女の子だとわかってから、みように意識しちまう。しかも、おたがいに裸。いや、裸よりもはずかしい格好をさせられてる。胸がドギマギして、チンチンがピクピクしちまう。こいつの割れ目の中に、おれのチンチンをつっこめるんだよな。

もしかして、こういうのを初こいって……いうわけねえよな。

そんなあまったるいドギマギは、就しんの時刻が来たらふっ飛んじまった。

教室でチンぶくろと縄フンドシを外して、自分の席に置く。木の棒もぬいて、これは水を張ったバケツに放りこんどいて。しん室へ移動。

ベッドはカマボコ形のかべの両側から中央に向かって置かれ、左右は密着して大きなベニヤ板がしかれている。ベッドにはさまれた中央の通路に整列して、コンクリブロックに名前を呼ばれた順に、かべに頭を向けてあお向けにねる。男子と女子がとなり合うようにされた。

おれの右側がソノで、左側は梅屋^{うめやくすみ}楠美という最年長の女子。ソノとは二つしかちがわないうのに、見た目は大ちがい。モジャモジャとツルツル、おわんとお皿。ソノの身体もそれなりに女の子っぽい曲線をしてるけど、楠美はきれいなヒョウタン形だ。一番のちがいは、イガグリとオカッパだけど、それは本人の責任じゃない。

半分の者がねたら、両手を広げて頭の側にある鉄パイプのわくに革バンドで、残り半分の者がつないでいく。ここまでは予測していたんだけど。

大章のやつ、おれの両足をつかんで開きながら持ち上げようとする。

「何するんだ。ふざけるなよ」

「そこ、うるさい」

バシン！

竹刀がゆかをたたく。しかられたのはおれのほうだった。

「やめろよ。やめろったら！」

ソノはおれより非力だからまったくいこうできずに、男子の手で両足を開かれて百八十度に折り曲げられ、まくら元のパイプわくの下につま先をおしこまれた。別の革バンドが足首を巻いた。

「いやだ、はずかしい。やめてよお……」

男言葉が弱々しい女言葉になってきた。

ソノはベッドの上で、深く折れ曲がった『く』の字にされてる。きっと、割れ目もこう門も丸見えだろう。おれからは見えないのが残念だなんて、これっぽっちも思っていないか

らな。

ソノはなんとか内股にして、すこしでもかくそうとしている。ソノがもがくののに気を取られているうちに、おれも同じ姿にされちまった。

「くそお。なんだって、こんなことするんだよ。男のおれだってはずかしいぞ。ほどいてくれよお！」

おれだけなら、がまんしていいけど——ソノは女の子だぞ。

「やかましい！」

ぼぐっ……腹に垂直に竹刀をつき入れられた。

「うべええ……げふっ、ごふふっ！」

胃液がのどにこみ上げて、それが逆流して、おれはちっ息しかけた。

「おまえらは、だまって教官の命令にしたがっておれば良いのだ」

「まあまあ、常持教官」

若ババが取りなして——くれてねえな。ベッドの上でおれのチンチンを見てたときと同じ目の色だ。

「きちんと教えてやれば、納得して素直に従うでしょうよ」

若ババが生徒たちってよりも、おれとソノを見下ろしながら長広舌をふるい始めた。

「年ごろの男女が同じ部屋でねるでしょ。しかも素裸で」

そうさせているのは、お前たちじゃないか。

「もし男女を分けても、同性同士でモモ色遊ぎにふけられないともかぎらないし……」

男同士でもヒワイなことをするって意味だろうか。どんなふうに……こう門にスリコギを入れるんだから、チンチンだって出来るよな。でも、割れ目とこう門は同じじゃないぞ。だいいち、女同士はどうするんだ？

「たとえ一人ずつにかくりしても、ジトクこういをする不道德者も出るでしょうね」

だから自分で股間をさわれないように、太腿をこすり合わせられないようにするんだってさ。めいわくってより、この姿勢をひと晩中なんてゴウ問だ。

身体を二つに折れば面積の節約になって、少ないベッドを大勢で使えるから合理的だと自まんして、やっと若ババは説明を終えた。

分らないことだらけだけど。ジトクってのは自分だけが得をするって意味だろうから、人数分はないベッドをみんなで使って他人にも得をさせてやろうってことかな。

納得は出来なかったけど、説得されたのかな。あきらめたと言うほうが適切だけど。ソノも文句は引っこめて、しくしく泣き出した。こいつ、女だってばれてから、どんどん女々しくなってきたぞ。

おれたち十七人をベッドにしぼり付けた（男子ばかり）十七人も八人が同じ要領でしばられて——最後の一人はコンクリが手を下した。

おれの向かい側は^{そのたいち}曾野太一って、ツバナレしたばかりの子だ。あごを引けば、かぱっと開いた股間が丸見え。小さいチンチンと縮かんだ金玉。こう門も上向いてる。おれが見てるのに気づいて、そいつも頭を上げておれを見た。でも、無関心そうにすぐ目をそらした。

これ、女の子でもヒワイとかじゃなくてコッケイなだけだな。

毎晩こうされてると何も感じなくなるのか、左となりの楠美は静かに目を閉じている。右側のソノは顔が赤い。泣いてはいない。無表情なんだけど、ぼうっとしてるようにも見えた。

教官が出て行って電気が消されて、部屋が静まり返った。就しん中の私語は禁止されてる。教官がいないんだから、すこしくらい、いいじゃないか。

「なあ、ソノ……」

「……………」

「ひどい所へ来ちゃったな。なんとかしてにげ出そうぜ」

「はずかしいよお……」

ソノがつぶやいた。おれの声なんか耳に入ってないらしい。

女の子だもんな。両側から男子にはさまれて、向かい側の（首をおこせば大股開きをのぞきこめる）やつも男で——はずかしくて他のことなんか考えられないんだろう。

ソノ以外のやつに話しかける気にはなれなくて、おれは眼も口も閉じた。

こんなはずかしい格好にされてるけど。あたりを警戒する必要もなく、雨に降られる心配もせずに、地面のしっ気で身体が冷えることもなく横になっていられるなんて、昨夜に続いての一年ぶりだ。もちろん、いくら快適でも、とらわれていることに変わりはない。焼印なんかおしやがって。必ずにげ出してやる。

にげる算段とか、若ババの部屋での出来事とか、放水と焼印のうらみとか——そんなことを、あれこれ考えているうちに、いつの間にかねむりに落ちて行った。

翌朝はうす暗いうちからたたき起こされた。昨夜の手順の巻きもどしでこう束を解かれた。腰が痛いし、手足がガチガチ。でも、すぐに全員整列で直立不動。

「教官どの！」

おりべかつすけ

織倍勝介って、おれと同一年のやつが挙手をしてコンクリの発言許可を得ると。

「昨夜、塩田が実浜に話しかけていました。実浜はだまっていました」

おれは列外に引き出されて、尻を竹刀で六発たたかれた。それくらいは、への河童だけど。

「整列休メッ」

足を真横に三十センチ開いて、両手は腰の後ろで組む。竹刀が足の間に差しこまれて、金玉をぴたぴたたたかかれても、姿勢はくずしちゃいけない——というのを、ビンタ二発で教えられた。そして……竹刀をはね挙げられて、もん絶。

常に全員が全員を看視してるんだって思い知らされた。

訓練と調教

裏庭の一面に、細長い屋根が建っている。というのも、おかしい表現だけど。かべがな

いんだから、小屋じゃない。その屋根の下にほられたミゾが、生徒の便所。教官の宿舎になってるカマボコのほうにはアメリカ式の立派なトイレがあるけど、生徒は使用禁止だ。

使用禁止といえば、フロもそうだ。古株の生徒の話だと、カマボコにはシャワー室というのもあったそう。だけど、水道もガスもないんだから、宝の持ちぐされ。つぶして、しん室や広間を広げたそう。

じゃあ、フロはどうしてるかというと、裏庭のすみにドラムかんの五エ門ブロがある。入れるのは教官だけで、おれたちは残り湯で身体のアカをこすって落とす。

さらに残った水が、ミゾに落ちた大きいやつを流すのに使われるんだ。だから、時間も回数も制限されてる。

年長の男子から十二三人がいっせいにしゃがんで用を足す。終わったやつはぬけて、そこを、年少者、女子の順でつめていく。

他の連中は女子も平然とシャアシャアブリブリやってるけど、おれたち新入りは悪戦苦闘。そりゃ、昨日も昼と夕方とねる前に使ってるけど、小のほうだけだったから。

その小も、おれ以外の三人（女子だぞ）は大変だったんだぞ。野シオンはだれだって経験してるけど、オトナの男に見られながらってのは初めてだもんな。

コンクリに竹刀で下腹部をつつかれたり、ソノより年上の貞女なんか、割れ目の中にある（らしい）おしっこの穴をコヨリでくすぐられて、ようやくだった。

おれは輪っかで針金をつっこまれてても、わりあい簡単に出来た。焼けるようなくすぐったような痛みがあって、そのし激のせいで固くなって、そこからは簡単じゃなくなったけど。

大きいのは朝だけで、昼間は木の棒（おれだけスリコギ）でふさがれて翌朝までがまんしなくちゃならないから、うんと力んでなんとか出せた。

それから、男子はチンぶくろ、女子は縄フンドシを自分の手で着けて。おれは輪っかも。これを自分で装着するのは、結構むずい。いじってるうちに固くなったりすると、必死に九九を唱えなきゃ。

教官が点検して、特に女子はフンドシがゆるかったりすると、結びこぶが割れ目に食いこむまでしめ上げられる。そうされると一日じゅう大変なんだと、これは後からソノに聞いた。ただ痛いだけじゃないらしいけど、それ以上の具体的なことは教えてくれなかった。

身支度(?)が整ったら、すい事係の女子三人を除く生徒全員が、鉄条もうの外にある畑で農作業。半裸で野良仕事はそ開先でさんざんやらされたことだけど、チンチンに太い針金をつっこまれて、こう門にはスリコギなんてのは、もちろん初めてのくつじょくだし痛いし。

おれは身体を動かしながら、ずっとソノを目で追いかけてた。あいつが女の子だったなんて、まだ信じられない。まして、イガグリ頭だもん。でも、日本一可愛いイガグリ頭だと思うぞ。

そうそう。野良仕事で一番きついのが、野外便所で流した先にある肥ツボからの肥くみ。オケに入れて畑まで運んで、ヒシャクでまく。力仕事ってわけじゃなく、とにかくばっちい。裸で作業してるから、服はよごれないけどな(皮肉)。

きついと言えば、山水を引いた貯水そうから台所やドラムかんブロへの水運びのほう为重労働だけど、水が飲み放題だから、生徒には人気がある——わけ、ないだろ。バツ直制で、他のやつがのんびりしてるときまでこき使われるんだから。

農作業が終わったら、黄変米と食料えん助物資のオートミールとかいうやつとカボチャとそこら辺の雑草(としか思えない)と、ちょっぴりのニボシとを混ぜたおかゆ。おれのことを告げ口した勝介だけは、たくあんをもらってた。おれの値打ちはつけ物ふた切れ分かよ。

朝飯の後は男子がろうごく、女子が教官宿舎のそうじ。それから……この日は、ほんとうに朝から夕方までふつうに学習だった。といっても、教師は帆針教官だけ。全員がひとつの教室で学年に応じたボロボロの教科書をくり返し読んで、ノートなんて貴重品だからねん土を固めた石板に細いロウ石で書く。石板はノートよりすこし大きいだけだから、いっぱいになったらボロ布で消す。そ開中の授業と同じだ。

自習してて分からないことがあったら、帆針教官のところへ行って教えてもらう。この人は、生徒をいじめたりはしない。他の教官からかばってもくれないけど。

昼に休けいが一時間あるけど、空きっ腹をかかえて外で遊ぶのは、年少者の一部だけ。勉強してるやつも少なくない。

みんな、すごく真けん。なのも当然だった。月末ごとにテストがあって、六十点以下だったらチョウバツを受ける。ふつうの学校だったら、チョウバツといってもビンタとかろう下バケツとか、厳しくてもホウキ正座（ひざの裏にホウキをはさむ）だけど、ここでは竹刀がいちばん軽くて、革ベルトだったり、チンチンにオキュウとか、立たせてしばったまま、ひと晩ほっとくとか。冬だったらこごえるし、夏は全身を虫に射される。

だから、おれも必死に教科書をにらみつけるんだけど、そ開してる時はろくに授業を受けてないし、二年前からはまったく勉強してないから、チンプンカンプンだ。ふろう児になってから身に着けた世間知ってやつは、通用しない。

そうそう。ずっと気になってたスリコギを立てたイスだけど。すくなくともこの日は、だれも座らされなかったし、革バンドでしばり付けられることもなかった。これはチョウバツとか特別な場合にだけ使うんだそう。それを教えてくれたのは大章だったけど、どういうのが特別かというのは「そのときになれば分かるよ」だとさ。

教室で半日を過ごせるのがどんなに幸せかというのを、翌日に思い知らされた。

収容所での三日目は、教室での自習じゃなくて、広い庭で職業訓練を受けさせられた。男子はほぼ全員だけど、女子は半数の七人だけ。かん別所から来た二人は除外されて、ソノは入っていた。

「ふろう児をやとってくれる所など、金のわらじでも見つからん。芸人になってサーカスや見世物小屋で客に笑われながら生きていくのが精いっぱい。だから、そういう芸を仕こんでやる」

親方にしばり取られるクツみがきだって路上立売だって、これ以上増えたって客は増え

ないし、新聞配達なんかは身元保証人がいないとダメだし。女の子は夜の商売があるって聞くけど、どうやらオマンコと関係あるらしいと、おれにも分かってきた。やりたがらない子も多いよな。

でも、だからといって。おれたちが仕こまれた芸ってのは、大道で演じたら一発で警察にしょっつかれるだろうくらいは、小さな子にだって分かるぞ。

おれたちは、チンぶくろや縄フンドシを外して、ほんとうの全裸にされた。輪っかもスリコギもなくなって、それは快適なんだけど。

最初に仕こまれたのは犬芸。チンチンとオテを裸の●供にやらせて、何が面白いんだろうって、最初は思ってたけど。とにかくヒワイでくつじょく的だというのが、次第に分かってきた。

基本姿勢はオスワリ。尻を地面に着けて、軽く開いた足の間に両手をついて。

それからチンチン。これも犬と同じ。口を半開きにして舌を出して、ハッハッハッとうれしそうに息をはかなきゃならない。中腰になって、しっぽの代わりに尻をふらされる。

その後が、人間犬にしか出来ないマンマン。オスワリと同じ姿勢になって、足は筋肉がけいれんしそうになるまで開く。そして、女子は両手で割れ目を左右に引っ張って、おくの院（というんだと、初めて知った）まで『ご開帳』しなきゃならない。

他の子は何回もやらされて手慣れたものだけど、それでもはずかしそうにしている。

ソノは、うすい乳房を竹刀の先でぐりぐりこじられて、泣きそうな顔になって『ご開帳』した。

男子にはマンマンがないけれど。マンマンをしてる女子とななめに向かい合って（正面は観客に開けておく）、両手を後ろについて腰をうかして——『ご開帳』を見ながら、チンチンを固く大きくしなくちゃならない。犬だから、手を使えない。女子は手を使わないとマンマンが出来ないんだから、こういうのをご都合主義というんだな。

チンチンなんて、自分の思いどおりにならない。なるんだったら、九九を覚える必要がない。とは思ったんだけど。西司照代^{にしつかきてるよ}のマンマンを見せつけられたら、これ以上はないっ

てくらいになっちゃった。

割れ目の内側にビラビラがあって、そのおくのつき当たりに開いてる穴がチンチンを入れる所らしい。上のほうにある小さな穴からは、おしっこが出るんだろう。小さビラビラが上で合わさってるところが盛り上がってて、小豆よりも小さいけれどチンチンの先っぽ見たいなイボが顔をのぞかせてる。何だろう、これ？

「なんだあ……おまえ、ぬらしてるのか？」

コンクリのすっとんきょうな声。ソノの股間をのぞきこんでる。

コンクリはしゃがみこんで、『ご開帳』に指をつき差した。

「動くな」

腰をうかしてにげようとするソノをしかりつけて、指を中で動かす。

「ますますぬれてくる。いん乱なガキだ」

いん乱てのは、ヒワイでミダラなことが好きって意味だよな。ソノが、そんなこと、あるもんか。

「いや、いん乱というのは当たっておらんだろう」

所長の意見に賛成したのは、これが初めてだった。

「ろ出きょうか、あるいはマドかしらん。延べ八十人以上の女兒を見てきて、疑わしいのは何人かおったが、これほどのは初めてだ」

コンクリんが、きょとんとする。

「ガラスをはめた窓ですか？」

「いやいや。男に痛いことやはずかしいことをされて喜ぶ女のことをマドイストというのだ」

「へええ。そんな女がいるんですかね」

「物の本には、そう書いてあるがね。女をいたぶって興奮する男をサゾイストという。これはいくらでも実例がある。そうだろう、常持教官」

「所長は男女を問わずじゃないですか」

コンクリの半じょうには取り合わずに、所長が持説を続ける。

「サゾイストが存在するのだから、マドイストだって居るだろうさ」

「そうですかねえ。こいつだって、ぶったたいたら、他のガキと同じ——いや、それ以上に泣きわめきますよ」

「女のいやよいやよは好きのうちというやつかもしれない。表情や声にだまされず、マンコを良く観察することだな。下の口は、うそをつかんよ」

こいつらの話はチンプンカンプンだけど、ソノがぶじょくされているのは分かった。でも、どう反論していいか分からないし、どんな悪口だって、竹刀でたたかれるよりはマシだから……ソノの目をじっと見つめてはげましてやるだけにしておいた。

ひとしきりサゾマド談議が終わって職業訓練の再開。訓練でよりも、調教だ。

ここからは、男子が二組に分けられた。女子といっしょに芸を覚える組と、教官の代理を務める連中と。

覚えさせられたのは、オアズケ、ヨシ、アムアム、ペロペロ、ゴックン。胸くそ悪い。

教官の前にオスワリして、「クウン」とか鳴いて。ヨシと言われたら、目の前のチンチンをくわえる。射ち方用意ヨシのもあれば射ち方ヤメのもある。女子の前の大砲は用意ヨシで、男子の前にあるのはおおむね垂れてる。例外は、おれの前に立った所長くらい。

チンチンを口に入れるなんて、男としてがまんできないくつじょくだ。女だって同じだと思う。なのに。

「ますます下の口からよだれが垂れているな」

ソノの正面に立ったコンクリが片足を上げて、股間をつま先でつついてる。

自分がぶじょくされたみたいで腹が立ったんだけど——ソノには聞こえていないのか、目を閉じてひたすら頭を前後にゆすっている。コンクリのチンチンが口を出入りしている。腰をこんなふうにかせと、おれが若ババに言われたとおりの動き方を頭でしている。ソノは頭の動きに合わせるように、つま先でくじられてる腰も左右にくねらせている。コンクリは足を動かしていないから、割れ目を自分からこすり付けているってことだ。

「よそ見るな」

所長に金玉を軽くけられて、おれは目の前の射ち方用意ヨシに向き直った。やればいいんだろ、やれば。

生まれて初めてくわえる他人のチンチン。

口を開けて顔を近づけ、ぱくんとくわえた。むわあっと、オトナの男の体しゅうが鼻にあふれた。なんだか、きゅろんとした歯ざわり、舌ざわり。ゴムを焼き付けた鉄棒に似てるかな。

「かむんじやない」

チンチンをけられた。

「もっと舌をからませろ。ていねいにしゃぶれ。頭を前後にゆすれ。くちびるをすぼめて全体をすすりこめ」

あれこれ言われて、頭がこんぐらかる。とにかく、口の中の棒コンニャクみたいなやつを、あむあむぺろぺろずぞぞぞ……。

「手は後ろで組んでおれ」

手を使ってしごいたり金玉をもんだりすると、白いおしっこ（精液というんだそう）が早く出るって——後でソノか言ってた。あのウソ親せきの医者に仕こまれたに決まっている。のは、話を聞く前から見当がついてた。だって、ソノはおれが四苦八苦してやってる、あむあむぺろぺろをすごく上手にやってるんだから。コンクリも気持ち良さそうにしてやる。おれはというと……

「ええい、下手くそめ」

所長は両手でおれの頭をおさえつけて、激しくゆすぶりながら自分でチンチンを出し入れし始めた。鼻がめりこむほど激しく腰を打ちつけてくる。

「んぶぶぶぶ……」

脳しんとうを起こしそうだ。

棒こんにゃくがいつそう太く固くなって……びゅくびゅくつとふるえたと感じたと同時に

に、のどのおくに水鉄砲を射ちこまれたような感覚があった。

「うげ……うっふ……」

「はき出すんじゃない。そら、ゴックン」

カルキとスルメを混ぜたようなにおいが鼻に広がる。こんなえぐいのを飲めっていうのかよ。でも、飲まないとい何をされるか分からない。口の中につばを貯めて、のどのおくに引っかかっているやつを飲み下した。

これで、オアズケ、ヨシ、パッくん、アムアム、ペロペロ、ガシガシ、ゴックンがひと通りは終わった。ふた通り目はなし。きっと、所長のチンチンがしょぼくれたせいだ。

犬芸の調教が終わっても、職業訓練は続けられる。次はブタ競争。

輪ゴムの三倍くらい太いゴムひもが『人』の字形になっていて、針金をつり針の形に曲げたのが結び付けられてる。真ん中のだけは、針金が二股。その二股を鼻の穴に引っかけて、頭のとっぺんから後ろまでゴムを引っ張り、『人』の字の足を左右に分けて耳の下から前へ持ってきて、つり針を鼻の脇に引っかける。

ゴムに引っ張られて鼻が上下左右にひしゃげ、たしかにブタ顔だ。

それから四つんばいになって。手首を二のうでに、足首は太腿にしばり付けられた。ひとひとひざでハイハイしなきゃならない。短い四つ足は、ますますブタそっくり。

太くて長い針金の付いた小さめのスリコギが、男女ともこう門につっこまれた。針金は視力検査の輪っかみたいに曲がっていて、反対のはしには先たんが丸められたパイプがかぶせてある。

男子は、それをチンチンにつき差さされた。要するに、おれが着けさせられていたスリコギと輪っかだ。玉ぶくろの根元をしめ付ける輪っかはないけど。

男子のパイプは直径が一センチくらいなのに対して、女子のはスリコギくらいに太い。それを割れ目のおくのチンチンを入れる穴におしこまれた。だれもそんなに痛がらなかった。

最後にひとりずつ、針金の底が地面をこするように曲げ具合を調節された。

庭一面に、レンガやら丸太やらが並べられた。それを乗り越えて庭のはしからはしまで四つんばいで進む障害レースだ。

女子は七人で一組。男子は二十六人もいるので、八人と九人で三組。それぞれの組の一等には、夕食に玉子焼きを追加してもらえる。逆に、ビリは夕食ぬき。そりゃあ、真けんになるよな。ただし、競争は一回じゃない。三回やって、その結果を紙に書いておく。全部の競争が終わってから、折り返されている紙のはしを開くと、どれが本番だったか分かるという、あみだクジみたいなやり方だ。

最初は女子の組からだったけど。

「おまえはぼう主頭だから、男子と競争しろ」

ソノが外されて、おれのいる組に入れられた。まあ、年下の子も混じってるから、そいつにはかわいそうだけど、ソノはビリをまぬがれるだろう。

教官の手で色とりどりのハチマキが、ゴムひもの上から額に巻かれて。

「ヨーイ、ドン！」

六人の女子がいつせいにかけ出した——んじやなく、よちよち進み始めた。

ブタ顔にされた女の子がブタみたいによたよた進むのはコッケイだけど、なぜかチンチンが固くなってきて、針金のせいですごく痛い。

並べられた丸太を乗り越えるところで、六人が同じように立ち止まった。顔をしかめたり息をつめたり。なかなか進まない。針金がつかえてるんだ。無理に進もうとすると、スリコギとパイプで二つの穴をこじられる。それがつらいみたいだ。

最初に通過したのは、^{きづめいこ}木津芽子という、おれと同年の子。二番手が、マンマンのときにおれに見せてくれた照代だった。この子、四つんばいになると、腹がぷっくりつき出ている。

「照代も、なかなかがんばるな」

「もう五か月でしょ。こういう遊びは、お腹の赤ちゃんに良くないですわ」

「なあに、流れてくれたら手間がかからん」

所長と若ババの会話で、照代がにんしんしてるというきょうがくの事実が判明した。あいつだって、まだ●供だぞ。●供でもにんしんできるんだ。

おどろいたのは、おれとソノだけらしい。会話は聞こえてるはずなのに、だれも知らん顔をしている。

「ああああん……」

苦しそうなうめき声をあげたのは、^{たけみずらんこ}武水蘭子だった。照代と同じ最年長者だ。丸太に輪っかをのし上げて、腰を前後にゆすっている。そんなことをしたら、穴をこじられていっそう苦しくなるだろうに。

「いい、いいよおおお……きもちいいよおお」

ええっ……？！

気持ち良いって聞こえた。

今度は、おどろいてるのは、おれひとりみたいだ。ソノはうつむいて顔を赤くしている。ああいうふうにしたら、ほんとに気持ち良いんだろうか？？

三分くらいで、蘭子をのぞく五人は丸太を乗りこえた。身体を横向きにして輪っかを丸太に沿わせて転げ落ちたり、後ろ向きに背中ですり上がったたり。

散らばっているレンガはよけて通れるから、丸太みたいな苦労はなかった。

五人がゴールインしても、蘭子だけは丸太でつかえている。

「いい加減にしろ。おまえもはらませてやろうか」

そんな簡単にできるんだ。世間じゃ、子供を授からないってなやんでる夫婦だっているのに。

コンクリにどなられて、蘭子も丸太を乗りこえた。正面からのし上げて、わざと手足を宙にうかせて——針金が体重でひしゃげてしまった。ので、そこから先はレンガなんか無視して一直線に進めた。ううむ……その手があったか。でも、なんで最初からそうしなしたんだらう。気持ち良いってのは、負けおしみじゃなかったんだ。

ずいぶん時間がかかったけど、とにかく二組目の競争。おれとソノの組だ。

「ヨーイ、ドン」

スタートラインに並ぶまでに分かっていたけど、前へ進むだけなら針金もたいしたさまたげにはならない。チンチンにびみょうなしん動が伝わって痛くすぐったいけど、それだけのことだ。

でも、ソノはしん動がつかいらしい。丸太に取り付くのがひとりだけおくれた。

丸太だって、乗りこえるのが困難な障害というほどじゃない。いきなり、これをやらされていたら、ずいぶんと苦しんだかもしれないけれど。高压放水を浴びせられたり、焼印をおされたり、ひと晩じゅう大股開きで二つ折りにされていたり、変ちくりんな装具を着けさせられたり、竹刀でたたかれ金玉をけられ……苦痛とかくつじょくには、ずいぶんとめんえきが出来ている。

男子八人が一団となってコースの半ばに差しかったとき、ソノはやっと丸太をこえたところだった。このままだと、確実にビリだ。今回が本番とは限らないけど、本番だったら食事ぬきだ。一回ぬかれたからって、命に係わることじゃないし。でも、ソノの目の前でおれだけが飯を食うのは……おれが、つらい。

なんて迷いながら、のろのろ進んでたら。前をよくみてなかったので、レンガの角に輪っかを引っ掛けちまった。ずにゅっと、チンチンから針金がぬけかけて……痛くすぐったい中に、はっきりと快感があった。

そうだ。蘭子の前例があることだし。おれは、すこしバックして、また輪っかをレンガに引っかけてみた。ずにゅ……気持ち良い。またバックして、姿勢を低くして針金をチンチンにおしこんで、またレンガに引っかけて。チンチンが固くなってくると、ますます気持ち良い。

「真三。おまえは、ベッドにこう束した後で竹刀を五発くれてやる。十発にされなくなったら、さっさと進め」

コンクリにどなられて、我に返った。ソノの尻が三メートル先にあった。ので、真後ろからついて行った。

短くされた足がびよこびよこ動いて、そのたびに尻が左右にくねる。割れ目からのぞく太いパイプも、すごくエロチックだ。あまり見つめ過ぎるとチンチンが固く痛くなってくる。でも、見続けてしまった。

残り二組も競争が終わったところで、おれと蘭子は列外にされた。

「真面目に競争をしなかったから、残りの競争には関係なく飯ぬきだ」

「はい、ありがとうございます」

後出しジャンケンみたいなコンクリの宣告に、蘭子はすぐに返事をした。どんなひどいことを言われても、この返事しか許されていない。

おれも、何秒かおくれて同じ返事をした。三分の一の確率でしかないけど、ソノを護ってやれたというほこらしさが混じっていた。

蘭子は、さらに追加のチョウバツを課された。頭の後ろで手を組んで上体を垂直に保ったままでの、ひざのくっしん運動を百回。それだけでも厳しいと思うけど、丁字形のくいを両足でふんで、その上でやらされる。くいの垂直に立った部分は先細りになっていて、長さが五十センチで直径は四センチくらい。ひざをいっぱい曲げると、こう門がくし差しになる。

「マンコはたん能しただろうから、ケツ穴でも遊ばせてやろうという親心だ」

「はい、ありがとうございます」

さっきの返事は不満たらたらが顔に出ていたけど、今度はほんとにうれしそうにも見えた。まあ、こいつは十四人の女子の中で飛び切りのブスだから、うれしそうな顔も鬼がアカンベエをしてるみたいだけだな。

なんて、他人のことをどうこう言ってる場合じゃない。

「おまえは苑子と仲が良いから、二人には所長どのに特別の芸を仕こんでいただくとしよう」

結局、ソノまで巻きこんじまった。

おれとソノはブタ競争の列から引きはなされて、裏庭へ連れて行かれた。コンクリはそ

の場で思いついたような言い方をしたけど、特別の芸のための準備は、すでに整っていた。バケツと火ばしと縄と赤いチャンチャンコと兵隊ぼうと鞭。鞭は平たい革ヒモを編み上げである。六年くらい前に見たサーカスで、もうじゅう使いがふり回していたのとそっくりだった。

チャンチャンコはソノが着て、おれが兵隊ぼうを後ろ前にかぶる。もちろん素っ裸だ。長い縄はソノの首に巻いて、おれが反対のはしを持つ。とりあえず鞭は使わないと知って、ひと安心。『とりあえず』だから、ふた安心まではできない。

そして、ひっくり返したバケツの底をおれが火ばしでたたきながら、所長から口移して口上を述べる。

カンカンカンカン……

「寄ってらっしゃい見てらっしゃい。サルまわしでござーい」

サルの仕種を真似ながら、ソノが飛んだりはねたり。

おれはアホらしいだけですむけど、ソノがかわいそうだ。

「はい、ソノちゃん。でんぐり返り。今度は後ろ向き」

ソノは後ろでんぐり返しが出来なかった。

「ね転がったまま、足を開いて顔をかくせ」

所長は、とにかくヒワイな形にさせようとする。

「は一い。頭かくして尻かくさずならぬ、頭かくしてマンコかくさずでござーい」

かくした手の間から、ソノがくちびるをかみしめているのがうかがえた。

宙返りをしろだの、番がさの上でボールを回せだの、所長は次々と無理難題をふっかけてくる。おれだって出来ない。

「サルには、身体で芸を覚えさせるのだ」

所長が鞭をおれに持たせた。

「それで存分にたたいてやれ」

おれは鞭を投げ捨てた。

「仲間をたたくなんて、出来ない。たたくんだったら、おまえがおれをたたけよ」

「そうか」

所長のやつ、おこったふうでもなく鞭を拾い上げて——いきなり、ソノをたたいた。

ぶゅんん……バチイン！

「きゃああっ……！」

不意打ちにたたかれて、ソノは胸をかかえてしゃがみこんだ。

「やめろ！」

所長はソノをけり転がして、背中をふんづけた。身動きできなくしておいて。

ぶんっ、バチイン！

ぶんっ、バチイン！

ぶんっ、バチイン！

立て続けに尻を打ちすえる。

「くそっ……やめろ！」

所長の腰にしがみついて引きはなそうとしたけど、力でかなうはずがない。

おれをつき飛ばして、また鞭をふり上げる。

「お願い、兄ちゃん。あたしをたたいて！」

ソノがさげんだ。

「ええっ……?!」

いろいろと、おれはびっくりした。

ソノに『兄ちゃん』なんて呼ばれたのは初めて。これまでは『兄貴』だったもんな。しかも『ぼく』じゃなくて『あたし』。ほんつとに、ソノは女の子になっちまった。なんてのは、いろいろの付け足し部分。おれに自分をたたいてくれってのが、一番のびっくり。

だけど冷静に考えると——所長に目茶苦茶にたたかれるよりは、おれに手加減されながらのほうが、ずっといいかな。

「小ぞう、どうする？ 好きな女の願いをかなえてやるか？」

「……はい、ありがとうございます」

所長は満足そうにうなずいて、おれに鞭をにぎらせた。

ソノは実は女の子だったけど、おれの弟分には変わりはない。好きな女なんかであるもんか。でも反論したって、おこらせるだけだ。それに、言われてみると……おれはソノが好きだし、ソノは女の子だ。

「何をしている。さっさとたたけ……いや、その前に」

所長はソノを立たせ、頭をかかえる姿勢を取らせた。

「よし、しょげているサルを存分にセッカンしろ」

ごめんよ。心の中で謝りながら、おれはソノの尻をたたいた。
ペチン。

「何をしておる。本気でたたかんか。これくらいだ」

ぶううん、バッヂイイン！

「あぐっ……」

所長のやつ、ズボンの革ベルトを鞭の代わりにして、おれの尻をたたきやがった。

ぶううん、バッヂイイン！

「まごまごしとると、こいつで愛しい女房をたたいてやるぞ」

ソノは女房なんかじゃないやい。けど、音から判断すると、鞭よりも革ベルトのほうが痛そうだ。なにより、わん力がちがう。

「ソノ、がまんしろよ！」

おれは力一ぱいに鞭をふるった。

しゅん、バチン！

「きゃあっ、痛い……」

ウソだとは思わないけど、余ゆうのある悲鳴だった。

「ガキは非力だから、しょうがないか。数を打て」

しゅん、バチン！

しゅん、バチン！

しゅん、バチン！

所長にたたかれた太く赤い筋の上に、ぼやけた細い筋が何本も重なっていく。所長は焼印の火傷をさけてたたいてたけど、おれにはそんな器用な真似はできない。火傷が治って肉が盛り上がったとき、形がくずれないだろうか。不名よ極まりない刻印だけど、ぐちゃぐちゃになってるよりはきれいなほうが、まだしもだと思う。

「よかろう。サルらしい真っ赤なケツになったな」

所長が満足そうに言ったのは、二十発ちかくもたたいてからだった。でも、まだ終わりじゃなかった。

「ついでだ。鞭打ちの指導をしておいてやろう」

さすがに、かんにんぶくろのオが切れた。

「ソノがちゃんと芸を出来ればいいんだろ。そっちを指導して……ください、所長どの」

最後は、切れたオをあわてて結び直した。

「メスザルが泣きさけぶのも芸のうちだ」

「そんなの、おれには出来ない！」

やっぱり切れちゃったぜ。

「では、こうしよう。わしがおまえを一発たたく。同じことを、おまえが女房に三回くり返すのだ」

「……………」

損得かん定で言えば、おれがたたかれるだけ損だ。でも、ソノを感じる痛みをおれも感じるとしたら、オアイコって考え方もできる。

「所長どの。お兄ちゃんをたたかなくても、お兄ちゃんはあたしをたたいてくれます」

「サルは口を利くな」

所長がソノに向かって革ベルトをふり上げたので、あわててソノの前に立った。

「おれをたたいてください。ソノは、おれがたたきます」

「ふふん。なかなか素直になったな。愛しい女房のためか。それとも、案外におまえもマドイストかな」

なんととも言え。おれはたたかれるために、所長に尻を向けた。

「そうではない。こっちを向いて、鞭は置いておけ」

正面をたたかれると分かっても、命令に従うしかない。さらに、両手を頭の後ろで組んで、足も開かされた。すごく不きつな予感しかない。

ぶううん、バッヂイイン！

「ぐっ……！」

胸を水平にたたかれて息がつまった。

ぶううん、バッヂイイン！

ぶううん、バッヂイイン！

立て続けに五発たたかれた。ということは、おれはソノを十五発もたたかなきゃならない。

「これからが本番だぞ」

所長が革ベルトを下に垂らした。

不きつな予感が当たった。ひざがガクガクふるえる。

ぶううん、バッヂイイン！

「うあああっ……！」

「お兄ちゃんっ……」

ベルトは太腿をかすめて股の付け根の右側に当たったけど、金玉にもすこし当たった。だけで、もん絶寸前。両手で股間をおさえて、おれはのたうち回った。

「情けないやつだ。直げきしたら玉が破れつして殺しかねないから、わざと外してやったのだぞ。さっさと立て。それともけりつぶされたいのか」

股間をかばっている手を後ろからつま先でつかれて、おれは歯を食いしばって立ち上がった。でも、すぐに元の姿勢にはもどれず、何回かケンケンをして、やっと痛みはがま

んできるくらいまで治まった。

ぶん、バチン！

「……………！！」

軽い打ち方だったけど、今度は直げきされた。おれは、また地面に転がった。

「女には金玉がないから、手加減はするな」

おれは片手で金玉をおさえながら、片手はひざに当てて、よろよろと立ち上がった。あまりに痛くてケンケンもできない。

「ひとつ、大切なことを教えておいてやろう」

背中をたたくときは、背骨に当たらないように気をつけろ。せきずい神経を傷つけると、手足が動かなくなることもある。下手をすると殺してしまう。しかし、それ以外は安全だし広い面積があるから、鞭を水平かななめにふるえば、たくさんたたいてもだいじょうぶだ——という、ぞっとする教えだった。

「なんなら、今から身体で体験してみるか。それとも、今すぐ女房をたたくか」

ソノをたたかなくてすむのなら、背中を百発たたかれたって平気だ。でも、そうしたらソノを三百発も鞭打たなければならない。

おれは腹綿をにえくらかしながら、鞭を拾い上げた。

「貧相な乳房に十五発、中^{ちゅうぶる}古^{ふる}いん乱マンコに六発だぞ」

「……………」

ソノがおれに向かって、鞭を正面から受ける姿勢を取った。

「ソノ、ごめんよ……」

「余計なことは言うな。おまえは、出来の悪いメスザルをしつけている太夫だ。それらしい言動をしろ」

「うきいい……」

ソノがサル^{サル}の鳴き真似をした。おれをかばってくれたんだ。ソノの心配りに応えるためには……おれは、ソノを鞭打たなければならないんだ。

おれは心を鬼にして鞭をふるった。

しゅん、バチン！

「うっきやああっ……！」

サルの泣き声に似ているけど、たしかに悲鳴だった。この悲鳴を、あと二十回も聞かなくていい。

しゅん、バチン！

「うっきやああっ……！」

しゅん、バチン！

「きい……」

しゅん、バチン！

「きひっ……」

だんだんとソノの悲鳴は小さくなって、五発目からは声を出さなくなった。

そのぶん、おれは罪悪感がうすれて、ソノのささやかな乳房を機械的に鞭打ち続けた。ささやかでも、鞭が当たるたびにふるんとはずむ。

「ちょっと待て」

十三発目に制止された。

所長はソノの足をふんづけるんじゃないかってくらいに近づいて、曲げた中指をソノの割れ目に差し入れた。

「あ……」

ソノが、びくんと身をふるわせた。

所長はごによごによと手を動かしてから指を引きぬき、目の前にかざした。ねとっとぬれている。所長が親指と中指とをくっつけてはなすと、糸を引いた。

「これだけ鞭打たれて、ぬらしておるとは。まさしくマドイストだな。そんなに痛いのが好きなのか」

「ちがいます！」

ソノがもう然と否定した。これまでは何を言われても悲しそうにうつむいてなみだをうかべるだけだったのに。

「痛いのはいやです。お兄ちゃんが、あたしのために受けなくてもいいセッカンをされて……うまく言えないけど、あたしと痛みを分かち合ってくれてるのが、うれしいんです」

「では、これはうれしなみだか」

所長は指を二本にして、またソノの割れ目をえぐった。親指で下腹をおさえるようにして、手全体をぐりぐりと動かした。

「くう……」

ソノはまゆをぎゅっと寄せてたえている。チンチンをねじられたら痛いよな。それと同じなんだろう。

「おや……おまえはおっ立てているじゃないか」

えっ……？

下を見ると、チンチンが固くなって、腹にくっつきそうになってる。おれは、ソノがいじめられるのを見て、それともおれ自身がソノをいじめて、それで……興奮してるんだろうか。そんなばかな。

「さてはサゾか。いや……サゾとマドが一人の中に同居しているとも読んだ記おくがあるぞ。おまえは、まさしくそれだな」

決めつけるな。いじめるにしてもいじめられるにしても、それで興奮するなんて変態だ。おれもソノも変態なんかじゃない。

「よかろう。まだ乳房に二発、とっておきのマンコには六発が残っている。思い切りマド女房をなかせてやれ」

何度も女房なんて言われてると、反発する気力が失せてくる。さっさと終わらせないと、どんな無理難題をふっかけられるかわからない。

ソノ、ごめんよ。また心の中で謝って、おれは鞭を水平に構えた。

ソノは両手を頭の後ろで組んで足を開いて、しゃんと立っている。なみだでぬれている

んだろう、きらきら光るひとみが、まっすぐおれを見ている。

しゅん、バチン！

「……………」

ソノは身体をゆるがせもせずは無言でたえてくれた。可愛い乳房だけが横にひしゃげて、ぷるんともどった。

しゅん、バチン！

ようやく十五発を打ち終えた。でも、まだ六発も残っている。胸とは比べものにならない激痛を、ソノにあたえなければならないんだ。

おれのためらいに気づいたんだろう。ソノが、ぐっと腰をつき出した。

「お兄ちゃん、ちょうだい。ソノのオマンコに鞭をちょうだい」

すこし開いた割れ目からは、あのとろっとした液が垂れている。だけど、おれも……チンチンが立ったままだ。

それぞれの心の中は、他人には分からない。仲の良い女の子を鞭打って興奮している男の子と、男の子に鞭打たれて喜んでいる女の子——他人の目には、そうとしか見えないだろう。

そんなこと、あるもんか。そう思いながら、おれは……下に垂らした鞭を手加減なしではね上げてしまった。

しゅん、バチン！

「きゃああああっ……！」

胸を打たれていたときとはまったくちがう、はき出すような悲鳴だった。

背筋が、ぞくとした。それは快感とか興奮じゃない。すりガラスをつめで引っかいたときのような気味の悪さだった。チンチンもしよげ返った。

そうか……胸を鞭打っていたときは、ソノに余ゆうがあるのが分かってたから、いけない遊びをしているようなさっ覚にとらわれていたんだ。でも、ここまでソノが痛がると、さっ覚はふっ飛んでしまう。

「さっきまでの勢いはどうした。ちょっと大声でさけばただで委縮しおって」

そういう所長も、ズボンの前はぺちゃんこ。サゾイストなら、興奮してるんじゃないかな。それとも、大人が本気で●供をたたいたら大け我をさせてしまうから、冷静を保って限界を見極めようとしてるのかな。

だとしても、こいつにソノをたたかせたくない。だったら、おれがたたかなくちゃ。おれは二発目をソノの割れ目に打ちこんだ。

「いぎゃああああっ……！」

ごめん、ごめんよ……おれは、ぼろぼろなみだをこぼしながら、さらに三発を打った。打ち終わると同時に、その場にへたりこんだ。

ソノも頭の後ろで組んでいた手をほどいて、股間をおさえてひざをついている。

「すこし痛めつけすぎたかな。これでは芸を仕こむのは無理だろう」

ようやく、バカバカしい限りの残こくきわまりない調教が終わった。だけどソノには、まだ次の苦痛が残っていた。縄フンドシだ。鞭打たれてはれあがった割れ目に結びこぶを食いこませてしめ付けなければならない。痛いから自分ではきつく結べないのだろう。所長に不合格を食らい、ぎりぎりにしめ上げられて、また悲鳴をあげた。

おれは、もう平気だぞ。スリコギも輪っかも、慣れてしまった。だから、チンぶくろだって、チンチンと金玉をひとまとめにねじったらもげてしまいそうなくらい、ヒモをきつく結んだ。それでも、ソノの受けている苦しみの一にもならないだろうけど。

※続きは製品版でお楽しみください。

【後書き】

この作品は、P I X I VでW I L L様からいただいたリクエスト（有料）に基づいて執筆しました。

リクエストへのしぼりは要点だけを記せば

- ・ロリマゾシリーズ（U 1 5／ヒロイン一人称）
- ・3万5千文字（1 0 0枚）程度の短編

この2点です。

毎度のことながら1 0 0枚程度に納められないのは、筆者の力量（が、有りすぎる？）のせいです。は、ともかく。

いただいたリクエストは、下記のとおりです。

*ストーリーのリクエスト

→戦災孤児となった少年少女が「刈り込み」により施設に入れられ、弄ばれ騷られるうちにマゾに目覚めていく

*時代設定のリクエスト

→終戦直後の日本

*シチュエーションのリクエスト

→時代や大人たちに翻弄される少年と少女

*キャラ設定（外見、性格）

- ・少年

x1～x2歳の戦災孤児達のリーダー。良い意味でのガキ大将気質で面倒みがよい。

●供達（後述）に家族を重ねており、特に弟分（後述）のことは文句を言いながらも

可愛がっている。

未だに剥けておらず生えてないのが悩み。

マゾの素質があり、嬲られる内に快楽を感じていく。

- ・弟分

少年より1歳年下で、兄貴と慕う薄汚れた●供。孤児達のムードメーカー。

実は身を守るために男装した美少女。やはりマゾで、少年ともに快楽に落ちていく。

- ・●供達

面倒を見ている孤児達。年上の二人を慕っている。

- ・役人

施設の管理者。閑職に回された不満を孤児達をいたぶることで晴らしている。

生意気な少年や美少女の弟分を嬲ることを気に入っている。

- ・進駐軍の士官

施設にやってきた軍人。サディストのバイで、接待により孤児達を痛めつけ犯す。

*人間関係のリクエスト

→少年と弟分はやがて男女として惹かれあう。

*特定の責めのリクエスト

- ・収容施設に隔離された孤児達。脱走防止のために衣服をすべて剥ぎ取られ、さらに焼印まで押される。

- ・手に職をつける体で、犬芸や豚芸を強いられる孤児達。屈辱的な行為のはずが、少年と弟分は興奮していく。

- ・進駐軍の士官にSMプレイを強要される少年と弟分。家族の仇から責められるという行為にさえ快楽を感じるようになった二人はマゾの雄雌として落ちていく。

※可能であれば、戦災孤児をかばって責められる（そして快楽を感じてしまう）少年や弟分を描写していただけると嬉しいです。

※歴史的におかしいと思われた箇所は修正していただいて構いません。

いやあ、それにしても。ますます名前遊びに拍車が掛かってきました。

主人公の塩田真三の裏読みは「しょたまぞ」です。

女の子の実浜苑子は「じつはまぞのこ」

所長の濃閑宇佐治は「こいじめうさばらし」

米将校は Philipped Bisaad ペドフィリアでバイでサドです。リクエスト通りでしょ。

初っ端の昭吾は、すでに小五じゃないのにショウゴという。

人名は端役に至るまで、遊び倒しています。こういうのはシリアスっぽい作品にはむかないとは思いますが、まあ、主人公もむけてない（字が違う）んですから。

その他の裏読みは、読者各位にてお楽しみ下さい。漢字のヒネった読みとか、名→姓の順で読み替えるのはありますが、米軍将校以外にアナグラムはありません。

端役でお遊びの極めつけは、取出間サダですかね。「とりで マサダ 誓い」あたりで検索してください。イスラエル士官学校の学生が戦跡に集って「二度とマサダは陥ちず」と誓うなんて、彷彿するだけで涙です。ショタイン（ショタ+ヒロイン）君も、サダの悲劇を繰り返さないと自らに誓うのです。時として過剰に思える自己犠牲は、この誓いを実践しているのです。デウスエクサクシャですねえ。

にしても執念深いというか。民間人大虐殺空襲を指揮した男に勲章をやったり、蒙古襲来の御先棒を担いだ連中の子孫に「謝れ」と言われて右往左往するどこかの国とは大違い。

おっと、ペダンチックの踏み違えでプリニウス・ミサイルになりかけた。

それにしても（二度目）。これまでは封印してきた、登場人物の生殖機能を奪うという暴挙（小説中では、ほぼ確定した未来）を敢行してしまいました。この先、濠門長恭クンは何処へ向かうのでしょうか。クオ・ヴァディス、ノミネクイネ（©筒井康隆）であります。

最後に。巻頭言の繰り返しになりますが、この小説はフィクションです。作中人物の口から語られる「過去の出来事」も、史実に基づくものではありません。もっとも、戦後から現在に至る沖縄での米兵による性的暴行の歴史を鑑みるに、戦時中に戦地でイエロージャップをどこまで人道的に扱ったか、疑念が残らなくもありませんが。少なくとも、(現在のロシア兵ではなく当時の) ソ連兵による民間人への残虐非道のような「歴史的証言」を筆者は寡聞にして知りません。

2022年11月

追記：2023年10月

ロシアは、またまたウクライナでやらかしましたねえ。

著 者：濠門長恭

表紙絵：藤間慎三

発 行：SMX工房

ブログ：<https://goumonchoukyou.jp/>